

埼玉県知事賞

越谷市立北中学校 三年 渡邊 優里

笑顔のタネ

税金は笑顔のタネだ。

私が小学生の頃に、そのタネはまかれた。両親が共働きだった私は、小学生の頃に学童保育へ通っていた。放課後の学童保育の時間に友達と遊ぶことはとても楽しかったが、学校が終わったらすぐ家に帰って、公園で遊ぶことができる友達のことがとても羨ましかった。羨ましいという気持ちは学年を追うごとにどんどん強くなって、放課後に学童保育へ行くことがだんだんと嫌になった。母や父に「やめたい、普通に帰りたい」と何回も伝えたが、仕事の都合上無理だと、申し訳なさそうに断られた。

そんな私を見兼ねたのか、私が小学校四年生になった頃から祖母が私の家へ来て、放課後に一緒に過ごしてくれるようになった。ずっと羨ましかった友達たちの生活と同じ生活ができることがとても嬉しかった。けれど、今まで祖母も働いていたのになぜいきなり平日に時間をとれるようになったのかがとても気になった。私は祖母にたずねた。

「おばあちゃん、お仕事どうしたの？お仕事行かなくなったらお金なくなっちゃうよ。」

祖母はにっこりとほほえみながらこう言った。

「ゆうちゃん的笑容が見たかったから、お仕事お休みしているの。お金は、おじいちゃんが稼いでくれているから大丈夫よ。」

祖父はずっと前に退職していて仕事はしていなかったので、「お金はおじいちゃんが稼いでくれている」という言葉の意味がわからず戸惑った。が、祖母が私のことを想い、仕事を休んでまでして私の相手をしてくれているという事実が嬉しくて嬉しくて、その事に関して深く追求はしなかった。

それから月日は経ち、租税教室や社会の授業を通して「年金」というものの存在や税金のしくみについて学んだ。あの時、祖父が受給していた年金のおかげで祖母はお金のことを気にせずに仕事を休むことができていたということを理解したとき、「税」というしくみのありがたさを実感した。

きっと世の中には税のおかげで生まれた喜びや幸せが沢山あるだろう。普段、何気なく払っている消費税などがその幸せのタネになっていると考えるとちょっぴり自分が誇らしく思えてくる。

私の祖父母の家に飾ってある、紫陽花の隣で笑っている私の写真。その私の顔には紫陽花に負けないくらい明るい笑顔の花が咲いている。この写真は放課後に祖母と公園に遊びに行った時の写真だから、この笑顔のタネも税金だ。幸せと笑顔のタネをこれからもみんなが受け取れるように、「納税」という形で水をあげ続け未来のタネを育てていきたい。